

実践報告

次世代地域リーダー育成プログラム上級段階  
「地域リーダー実践（上級）Ⅰ，Ⅱ」実践報告  
「石徹白ウォークラリー」と「秘密基地大作戦！」

塚本 明日香

大宮 康一

益川 浩一

# 次世代地域リーダー育成プログラム上級段階 「地域リーダー実践（上級）Ⅰ，Ⅱ」実践報告 「石徹白ウォークラリー」と「秘密基地大作戦！」

塚本 明日香，大宮 康一，益川 浩一  
岐阜大学地域協学センター

## 要旨

本論文は岐阜大学地域協学センターで実施している次世代地域リーダー育成プログラムのうち、上級段階の科目である「地域リーダー実践（上級）Ⅰ，Ⅱ」に関する平成27年度の実践報告である。9人の学生が受講し、郡上市白鳥町石徹白をフィールドの中心として2チームで活動を実施した。Aチームは石徹白ファンづくりをコンセプトにしたウォークラリー，Bチームは中一ギャップの解消をコンセプトにした小学6年生向け企画を実行している。各チームの企画から実施，最後の成果発表に至る授業の流れを整理し，平成28年度も在籍している4人の学生へのインタビューから学生たちの得たものについて考察，プログラム上級段階科目としての方向性を確認している。

キーワード：COC事業・次世代地域リーダー育成プログラム・地域活動・実践型科目・郡上市石徹白

## 1. はじめに

### 次世代地域リーダー育成プログラム上級段階について

岐阜大学では平成25年度より文部科学省が進める「地（知）の拠点整備事業」（大学COC（Center of community）事業）に採択されており，その実施機関として地域協学センターが設置されている。事業運営の柱としては「次世代地域リーダーの育成」「地域志向学の推進」「多様な人びとが集い議論する『場』（ぎふフューチャーセンター）の形成」の3つの取組みを掲げている。

このうち「次世代地域リーダーの育成」のための具体的展開として平成27年度より実施している「次世代地域リーダー育成プログラム」は，岐阜大学生が「地域（岐阜）を知り」，「地域（岐阜）の課題を見つけ」，「地域（岐阜）の課題解決に向けて行動する」能力を備え，地域で実践的に活躍してリーダーシップを発揮できる人材ならびにリーダーを支援する人材である「次世代地域リーダー」を育成・輩出することを目標とする教育プログラムである。

初級段階と上級段階に分かれ、初級段階で基盤的能力の基礎的な素養や能力を身に着けたと認められた学生が、上級段階では地域社会を活動の場としてより実践的な実行力を身に着けることを目指している。

上級段階に進むためには初級段階における所定の8単位以上の取得が求められる。8単位の内訳については、座学の地域志向科目群だけではなく、ボランティア活動を含む地域活動科目群か、インターンシップ活動を含む地域実践科目群からの単位取得が要件となる。すなわち、地域（岐阜）にかかるある程度の知識に加えて何らかの具体的な地域活動経験を有している学生たちが、上級段階の対象者となる。

上級段階科目である「地域リーダー実践（上級）Ⅰ，Ⅱ」は、原則としてグループで課題に取り組むことと、少なくとも一度は学生主体で地域の課題解決に向けた企画を実施することを前提としている。上級段階科目の履修を終えた学生には「次世代地域リーダー育成プログラム」の修了証と「学生コーディネーター」の称号が授与される。

平成27年度は上級段階科目の初実施であるため、既に地域協学センターとの取組み実績のある郡上市石徹白地域をフィールドとした。

なお実施に際し、教員以外の協力者として地域協学センターが委嘱している現地コーディネーターを始め、現地と関わりの深い方々にも企画内容に応じて協力頂いた。

### 平成27年度を受講生

平成27年度以降の入学者は規定のプログラムを進むことになるが、それ以前の入学者に対しては上級段階の受講資格を満たすか否かを個別に認定する。平成27年度はプログラム開始初年度で、規定通りの受講生は初級段階にしか在籍しないため、8名の平成26年度以前入学者について受講資格を認定して上級科目を実施した。

受講資格の認定については、「次世代地域リーダー育成プログラムにおいて初級段階で必要な8単位以上を修得したものと同等と認められる者の取扱いについて」に基づき、各学生から成績表を提出させ、平成27年度の次世代地域リーダー育成プログラムの科目群と照会して取得単位を確認した他、ボランティア活動等の実績についても記述させて審査した。この他、対象地区である石徹白での活動実績がある学生1名を聴講生として受入れた。

以上9名の学生は、5月から活動を開始した4名のグループと、7月から活動を開始した5名のグループとに分かれて取り組みを行っている。ここでは便宜上5月から活動を開始した方をAチーム、7月から活動を開始した方をBチームとして記述する。各チームのメンバー構成を表1に記す。

表1.チームのメンバー構成

A チーム		B チーム	
所属・学年	人数	所属・学年	人数
工学研究科修士課程1年生	2名（含聴講生1名）	教育学部4年生	5名

教育学部 3 年生	1 名		
地域科学部 2 年生	1 名		

### 活動対象地域

対象としたのは郡上市白鳥の石徹白地域である。白山信仰の拠点として栄えていたが、過疎化と高齢化の進む地域であり、1950年に1000人以上いた人口は現在約250人である。地域が存続するために「30年後も小学校を残そう」とスローガンを掲げ、様々な地域づくりの活動が行われており、2011年以降8世帯23人が移住している（2015年現在）。

こうした地域活動が盛んな地域であることに加え、石徹白の移住者で石徹白地区地域づくり協議会事務局メンバーの平野彰秀氏が、地域協学センターの委嘱する現地コーディネーターでもあるため、プログラムの実施対象地域として教員側で設定することとした。

### 本実践報告の構成

各チームの活動概要を順に記した後、実践を通じて見られた学生の学びについて論じる。特にAチームのメンバーは全員が平成28年度も在籍しているため、重ねてインタビュー調査を実施した。

## 2. Aチームの活動概要

Aチームの企画は、過疎化が進み移住者の呼び込みに力を入れている石徹白のファンをつくるためのバスツアーである。このチームは企画実施までの紆余曲折が激しい。ガイダンスを終えて5月にグループワークを始めた時点では、8月上旬の企画実施を予定していた。しかし活動が間に合わずに延期、実施日は10月にずれ込むこととなった。

当初の企画実施予定日だった8月8日から9日にかけては合宿を行い、メンバーの意識づけを改めて行った。この合宿が大きな転機となっているため、合宿以前を第一期、合宿以後から企画実施までを第二期、振り返りから成果発表までを第三期として記述する。

### 第一期（グループワーク開始～夏合宿）

5月13日にメンバーの顔合わせを行い、活動対象である郡上市石徹白地区について現地コーディネーターの平野彰秀氏から説明を受けた。この時点で8月7日から9日にかけて主に大学生の若者を対象とした2泊3日のスタディ・ツアーを実施するという方向性を提示し、まずは5月17日と24日に現地調査を行うこととした。

5月17日は白山中居神社の例祭、キャンプ場等を見学した。5月24日は、石徹白の移住者が放置林整備を兼ねて経営している「冒険の森」のツリートップアドベンチャーを体験した他、別行動をした教職員は石徹白の杉を見学に行っている。その後、6月3日から4日にかけて郡上八幡にて合宿を行い、各自の役割と今後の方向性について相談した。

6月の合宿時には企画内容の変更とメンバーの役割分担が確認された。

企画内容の変更は、学生からの提案で2泊3日から1泊2日に短縮された。ツアー参加者が負担するであろう金額を想像すると2泊3日で3万円程度の負担となり、大学生対象のツアーとしては集客が相当難しいと考えられること、小さな集落なので2泊3日で満喫してもらうよりも楽しくて物足りないくらいの方が再訪を期待できること、の2点が理由として挙げられた。

メンバーの役割分担は漠然と、最年少の2年生がリーダー、他は内容を詰める企画担当と参加者を募る広報担当とに分かれることとなった。ただ、この時具体的な作業を考える前に役割名だけを振り分けたことが、結果としてチームの動きが悪くなる一因となってしまった。

6月の合宿後、授業として週に1度メンバーが集まり打合せを重ねている。しかし広報担当者が広報先のリストアップ、広報用キャッチフレーズ等を確定させていくのに対して、なかなか企画内容が煮詰まらない。加えて、宿泊を伴うツアーのため旅行業法との兼ね合いを確認する必要があることを平野氏から指摘され、バス会社と相談する必要も生じた。

結局6月24日の時点で、ツアーの核となるウォークラリーの具体像が見えておらず、バス会社ときちんとした相談もできていない状態だったため、翌週7月1日に集まった際に指導教員から実施延期もしくは企画を根本的に変更するように通告した。その場の話し合いで、ここまでやってきたツアーを止めてしまうのは嫌だ、と学生間で意見がまとまり、延期する方向で進めることとなった。

20人で仮予約していた宿は謝罪してキャンセルし、もともとの実施予定日はツアーに向けた調査日程に位置付けることとした。なお、これらのキャンセルや実施延期の連絡を学生から行った際、平野氏からは「ツアーの開催自体が目的化していないか」「延期したところで実施可能なのか」との問いかけがなされている。

延期を決めた後、7月中は改めて石徹白の魅力洗い出そうと、文献調査も実施した。石徹白の魅力を伝えるツアーを企画するのに、自分たちが実際に行ったごくわずかな部分だけで話を進めてきており、「行かなくても分かることもあるはずだ」と各自担当する本を決めて読み合わせることにした。しかしその作業がツアーにつながるという意識づけは不十分で、内容にあまり意味のない発表も見られ、実際のツアーに活用された内容はごく一部に過ぎなかった。

延期後、実施日程をメンバー全員の都合がつく日程で白山中居神社の秋祭りもある10月18日を含めた土日に決定してからは、少しずつ企画が進むようになった。また、石徹白の里歩きを実施しているNPO法人やすらぎの里のを知り、ツアーの一部アテンドを依頼すると決めたことでツアー内容も多少はイメージできたようである。ツアーの核となるウォークラリーのための地図の作成等、都合のつく学生だけで集まって作業をする場面も一度だけあり、8月の下見に向けて企画書の形を整えていくこととした。

下見合宿では、まず集落の中でも古式を多く残している清住邸を見学させて頂いた。ここ

のお宅見学をツアーに組み入れるかどうかの検討も兼ねてお話をうかがった後、午後はNPO 法人やすらぎの里の吉田氏と顔を合わせて現在考えている内容についての提案を実施。今後リーダー役の学生と吉田氏とで連絡を取り合うこととし、実際に集落の中を案内していただいた。

夜は改めてメンバー同士の意識確認を行う。何を期待してこの授業を受けているのか、チームで企画にあたるためにはどうすれば良いのか、を書き出させ、動きの鈍いチームの雰囲気を組み直すこととした。

ツアー内容についてもコンセプトから確認し直し、「石徹白のファンづくり」と謳う「ファン」がどの程度のものなのか、共通イメージを作りなおしている（表2）。

確認の結果、石徹白のことを知らない人や、知識として知ってはいるけれどファンではない、という人たちを対象に「誘われたら行く」という階層にグレードアップしてもらえるようなツアーにしたい、というコンセプトが決定する。それに沿って考え、なるべく間口を広くたくさんの人に来てもらうという主旨で全員が一致し、ツアーを日帰りにして費用を抑え、石徹白の中をゆっくり見て回れるウォークラリーを実施することとした。

表2: ファンの階層

低←……………→高			
知らない	知ってはいる	誘われたら行く	自発的に行く

## 第二期（夏合宿後～ツアー実施）

合宿後、メンバーがインターンシップへの参加で入れ替わり不在となったため、直接対面によるミーティングは9月16日まで実施しなかった。代わりにスカイプを利用したミーティングを何度か実施し、その内容をメールで教員に報告する形を取ることにした。

広報にあたってのチラシのコンセプト、ウォークラリーで使用する地図の作り込み、具体的なルール作り等がスカイプミーティングで詰められた。

実際の動きのイメージができたこともあって、それ以前に比べると話し合いがきちんと進められている様子だったが、大きな問題点としてツアー実施に当たって必須となるバスの手配がずいぶんとずれ込んでいた。スカイプミーティングの報告を8月末にまとめて受けた際に、バスの料金が確定していないことを教員から指摘したが、バスの予約見積もりを担当した学生の動きが鈍く、かつその成果をきちんと共有していなかったことが発覚する。そのため必要経費が不明のままとなり、参加者募集に際して参加費を計算することができず、広報活動に大きな遅れが生じていた。

結局この部分を全員で情報共有できたのは9月16日であり、参加費を4,500円、最少催行人数15人という設定をしたものの、バスのキャンセル料が発生するため申込み締切りが9月27日という非常に厳しいスケジュールとなった。当然人集めは間に合わず、申込み締切りの時点で3名程度しか参加者を確保できなかったためバスはキャンセル、メンバーで緊急相談をしてレンタカープランを立ち上げるという対応をしている。

しかし、レンタカープランは学生が運転するという内容のため、安全確保の面から授業企

画としては許容できない。それを単に通知すると企画中止に追い込んでしまうため、合宿以降リーダー的な存在となっていた修士課程 1 年生の学生に個別指示を出し、バス料金を地域協学センターで負担する形で実施したいと、学生側から提案してもらうこととした。この際、地域協学センターが費用負担をする名目として「岐阜大学生の地域学習の一環」と位置付けるため、参加者は間口を広く募集するという当初予定から、岐阜大学生に限定するという形に変更した。

この提案により、参加者の負担する金額は 1,000 円まで抑えられ、ぎりぎりまで人集めが可能となり、授業での告知等も行った結果、最終的には 10 名の参加が得られることとなった。また、参加者を募る傍らで当日の動きの確認やしおり、マップの最終確定、アンケートの作成といった作業を進めていった。

当日の 10 月 18 日は天候に恵まれ、10 名の参加者を 2 グループに分けてウォークラリーを実施（表 3）。運営メンバーは集落見学の解説をしてくれる吉田氏との連絡や、会場設営、景品の買い出し等、事前に定めた役割分担に沿って行動し、無事にツアーを終えることができた。

表 3：実施した企画の概要（A チーム）

全体コンセプト：石徹白のファンを作る！！		
時刻	内容	ねらい
08：00	岐阜駅前発（大学経由）	
10：00	石徹白着	①石徹白の歴史や文化に触れる
11：30	①白山中居神社 秋の例祭見学	
12：30	①集落見学（解説付き）	②石徹白の魅力を肌で感じる
13：30	②ウォークラリー実施	
15：30	③ウォークラリー結果発表	③感じたことを共有する
16：00	石徹白発	

### 第三期（振り返り～発表）

ツアー実施後、10 月 22 日にまずはメンバー間で実施結果についての報告を行い、振り返り学習のために実施に至るまでのスケジュールの確認を実施した。アンケートにおいては「また、石徹白に来たいですか？」の問いに対して全員が「はい」を選択したことが報告され、この項目を以てツアーの目的は達成できたという評価がされている。

翌週 10 月 29 日までに全員振り返り文を書いてくることとし、29 日は持ち寄った振り返り文を元に反省を実施。教員側からメンバー共通の課題として、話の要点を把握し順序立てて考えることが上手くない、という点を指摘し、その対応として輪読を実施することとした。したがって 29 日の集まり以降は、振り返り文をベースに教員と学生が個別のやりとりで振り返りを実施することと、授業時間として週に 1 回集まって輪読を行うことを並行して行っている。

振り返りは各学生の状態に合わせた個別指導とし、大きく四段階で実施した。

第一段階ではチームにおける自身の役割が何で、それを自分がどの程度果たせたかということについての記述を行った。最初に書いた振り返り文がこれに当たる。聴講生 1 名はこ

の記述ができておらず、自身の役割とチームの動きの関連をきちんと記述できることを目指して個別指導を実施した。また、教育学部3年生の受講生は教育実習のため不在期間が3週間あり、自身の行動についての振り返り文は記述していたもののそれ以上掘り下げることなく第四段階の全体振り返りに臨むこととなった。

他2名の学生は、第二段階として他のメンバーに対する要望等の書き出しとその根幹にある課題の洗い出しを行った。他者の姿を鏡にすることで、そこで自分がどうすべきだったかを考える契機としている。この段階は他のメンバーに対する個別コメントを求めるため、全体での共有は図らず個別に文書ファイルをやりとりした。

第三段階では個別に記述した課題を元に、チーム全体の課題として一般化した記述を目指し、それに対してどういった対策を取るべきかを考えさせた。この段階の記述内容を、全員で共有できる形にまとめさせ、最後の全体振り返りにつなげている。

最終段階として、12月17日に石徹白から平野氏に来ていただいて全体の報告と振り返りを実施した。第三段階まではいわば仲間内での振り返りであるが、学生活動を受け入れた側の平野氏からの視点が入ることで全体を改めて客観視することが可能となった。報告は実施に至るまでの経緯・実施概要・実施結果（アンケート結果報告）・反省内容の4項目をそれぞれ分担して資料を用意し、平野氏に説明している。平野氏からは「受講動機」「地域の魅力をどう感じたか」「この経験を経て今後どうしたいか」という問いかけがあり、その場で学生たちがそれぞれ回答した。こうした振り返りの後、改めて各自が回答内容を文章にまとめて振り返り学習を完了とした。

個別指導の振り返りの傍ら、週に1度集まって輪読を実施している。教材として使用したのは塩野米松による職人への聞き書き集、『手業に学べ 心』『手業に学べ 技』（いずれも筑摩書房2011）の2冊本である。聞き書きの相手によって分量にばらつきがあるため、不公平感のないように概ね20頁前後の収録となっている8つの章をピックアップし、各学生が2章ずつ担当した。

輪読は話の要点をきちんとまとめる訓練として位置付けた。聞き書き集という性質上、著者が明らかにしようとする聞き書き対象者の姿は、説明的な文章としては表れず、対象者の言葉で語られる。その言葉から職人像を読み解くことは、明文化された指示ではなく自分たちで考えながら各々が取り組むべき内容を見出すことに通じると考えた。

要点をまとめることが主眼で、同時並行で振り返りの文章指導を行っていることから、題材に対する追加調査は求めなかったが、地場の職人への聞き書きという題材が「地域リーダー育成プログラム」の教材として適していると考えたことも教材選択の理由である。

基本的には1回の集まりにつき1章を紹介する形で進めたが、年内最後の集まりとなる12月24日だけは前週に平野氏を交えての反省会を実施したこともあり2章をまとめて読み解いた。また、読み解いた題材が20頁程度の聞き書きで終わるものではないと知ってもらうため、冬休み中は各題材に関連する書籍1冊をそれぞれに貸し出している。

年が改まってからは発表準備に終始した。平野氏への報告の際に実施した役割分担を継



続ける形で各自がスライドを作成し、持ち寄って改良検討と発表練習を実施し、3度の準備回を経て1月27日の発表会に臨んだ。この発表会を以て授業の最終回としている。

### 3. Bチームの活動概要

Bチームは教員採用試験に取り組む教育学部4年生5名のチームのため、実質的には7月の始動である。過疎地域にある小規模小学校にしばしば中一ギャップの問題が見られることに着目し、その解決のために白鳥中学校区の6つの小学校児童を対象に、交流を深めるための企画を実施した。11月の実施に向けて3度の現地調査を実施した他、9月以降は郡上市教育委員会との打合せや各小学校への説明を行っている。

Bチームについては9月に企画書が出来上がるまでを第一期、11月8日の実施までを第二期、最後の発表までを第三期として記述する。

#### 第一期（グループワーク開始～企画書作成）

Bチームのメンバーは6月になってからのプログラム登録者である。6月2日に登録のための面接を行った後、7月1日から活動を開始した。

7月1日はまず実践場所として、Aチームが既に活動を開始している石徹白地域についての紹介を教員から行った。他地域での実践希望があれば検討するとしたが、石徹白地域を対象に進めることで合意を得た。

その後、2回目の集まりとなる7月8日は、石徹白地域の課題を掘り起こすグループワークを行い、自分たちで取り組む課題の対象として小規模小学校の子ども達に着目。3回目には地域の特性を活かした企画として秘密基地づくりの案が出され、4～6回目にはその実施方法や対象学年等についての検討、及び現地調査に向けての検討事項の整理を順次進めていった。

8月8日、9日の夏合宿がBチームにとっては初めての石徹白訪問となる。この時に初めて平野氏とも対面し、現地を見ることなく企画先行していることについて指摘を受けた他、小学生や小学校行事についての情報を提供して頂いた。現地調査としては秘密基地づくりの実施場所となり得るキャンプ場と冒険の森を実見し、ちょうど宿泊先の民宿を営む家族に小学校6年生の児童がいることもあって親子へのヒアリングを実施した。また、夜に地域住民の方を含む寄合があるのに参加して、子育て世帯の住民の生の声を直接聞くことができた。

合宿後、現地調査で得られた情報を整理して企画書をより具体的に作成し、対象者を来年度中学校に上がる6年生に絞り込むこととした。もともと課題の洗い出しとして小規模小学校児童の中一ギャップに注目しており、高学年を対象にした企画を考案していたところ、実際の6年生児童のリアルな声を聴いたことでよりポイントを絞った形である。同時に自然に恵まれた地域だが子どもたちの遊びで意外と自然を使ったものが少ないことも確認し

たので、企画内容も森での秘密基地づくりの方向で確定させている。9月13日の2度目の現地調査時には石徹白小学校の校長先生に説明・相談ができるように整えていった。

## 第二期（関係者訪問～企画実施）

9月13日は石徹白地域の運動会の実施日である。石徹白小学校の児童全員が参加するのみならず地域住民も交えてのイベントであるため、小学生対象の企画イメージをより明確にするために日程を合わせ、体調不良による欠席1名を除くメンバー4人が石徹白を訪れた。

運動会に学生たちも参加した後、石徹白小学校長に相談の時間をもらい、企画の説明を実施した。対象者が石徹白小学校の児童だけでなく白鳥中学校区に及ぶこともあり、教育委員会と相談する必要性を示唆された他、校長会で情報共有をしていただけることとなった。教育委員会との連携の必要性は、他に郡上市から派遣されている地域協学センターの地域コーディネーターである猿渡氏からもアドバイスを受けており、猿渡氏を通じて連絡を取ることとした。

教育委員会への取組み説明は9月25日に実施し、メンバー1名と指導教員とが郡上市教育委員会を直接訪問している。参加者を募るための各小学校へのアポイントメントがスムーズにいくよう協力を頂いた他、問合せ先、保険、雨天時の対応、チラシ配布の際のアドバイス等について助言を頂き、それをもとに対応を協議した。

まずは参加者を募るのに対象となる白鳥中学校区の小学校5校（除石徹白小学校）を回るため、その用意としてチラシの改訂と参加申し込みの集約方法について整理し、その後保険や雨天時の対応についての話し合いを実施した。

小学校の訪問は10月16日と19日の2度に分けて実施し、指導教員が同行はするものの学生自身が各小学校長等に説明し、参加申込の取りまとめを依頼する形を取った。中でも北濃小学校についてはご厚意で参加対象者である6年生に直接説明する時間も頂き、恐らくはそのおかげもあって多くの参加者を募ることができた。

申込は10月26日を締切とし、各小学校で取りまとめた申込用紙を返送用封筒で地域協学センター宛に郵送して頂いた。申し込み者は23名で、白鳥中学校区の小学校6年生が総勢96人であることを考えると望外の人数であった。参加人数が確定したことを受けて保険会社と連絡し、他に必要と思われる安全配慮も重ねて確認している。

なお、小学校訪問の隙間である10月18日はAチームの企画実施で石徹白行きのバスを地域協学センターで出していたので、Bチームのメンバー2名が同乗し、ウォークラリーを実施している裏で最終的な現地確認と秘密基地の試作を行った。

この後、当日雨天の可能性が濃厚になってきたため、雨天時用プログラムの考案にも時間を割くこととなる。会場は、石徹白小学校長から体育館を使用することについて口頭で許可を得ていたのだが、使用が現実味を帯びてきたため具体的な手順等を確認している。内容については各自が小学生向けレクリエーションを2つずつ考えてくることとし、持ち寄られ

た内容から3つに絞って雨天時のプログラムを整えることとした。

雨天時の対応も含めて役割分担をし、メンバー5名中3名が前日から現地へ入って最終準備を行った。この時点では全体掲示用のスケジュール表について、晴天時の秘密基地決行と雨天時の体育館内レクリエーション実施の2パターンを作成している。石徹白は山の尾根筋を越えた先にあり、曇り模様の前日の様子では判断がつかなかったためである。

当日朝はあいにくの雨であり、体育館レクリエーションの実施となった(表4)。当日欠席者が1名いたものの、22名の小学生が集まり交流を深めている。最初にチームを作って自己紹介をした後、レクリエーションと記念品づくりを実施した。司会進行等も事前の役割分担通りに進めており、想定より若干早い進行ではあったが余裕ができた分は体育館で仲良く遊んでおり、滞りなく企画を終えることができた。

表4：実施した企画の概要（Bチーム）

全体コンセプト：同一中学校区の小学6年生が、中学校で再会したときに円滑な人間関係が築けるようにする		
時刻	内容	詳細
08:00	白鳥庁舎集合	①じゃんけん列車、フルーツポンチ、シート乗りを実施。徐々に子どもたちの距離を縮めさせた。
08:15	道の駅白鳥集合	
09:15	オリエンテーション	②手元に残る記念品（集合写真のしおり）を作る。
09:30	①レクリエーション	
10:15	②記念品づくり	
11:00	お昼ごはん	
11:45	振り返り	
12:00	終了	

### 第三期（振り返り～最終発表）

企画終了後初回となる11月18日の集まりは、アンケート結果の共有とお礼状の発送を行った。アンケートにおいて企画目標の達成度を見るための「中学校に行くのが楽しみになりましたか？」の質問については、「楽しみになった」が17人、「以前と同じくらい」が5人、「楽しみではなくなった」が0人という結果であった。現地でも「帰りたくない」「また中学校で会いたい」といったコメントが出ていたことから、目標は達成できたという評価を下している。また、協力してくれた各小学校、教育委員会宛に各自手書きで用意したお礼状の原稿案を持ち寄って誤字等をチェックし、その場で宛名を作って送付した。

その後1月14日まで5回の発表準備を経て、1月21日にリハーサル、1月27日に発表本番を迎えた。途中、メンバーの1人が全く参加しない時期があったが、最終的な発表会では全員そろって発表を終えることができた。発表会には石徹白小学校長も臨席していただき、児童の反応を例に挙げて企画の成果を褒めるコメントを頂いている。これに先立って企画実施直後にも児童の立場を踏まえたお礼のメールを頂いており、学生だけでなく運営関係者一同にとって大きな喜びとなった。

なお、この発表を以て授業としては終了しているが、更に3月1日に開催された平成27年度中部地区COC事業採択校「学生交流会」においても、岐阜大学代表としてこのチーム

が発表を行った。

#### 4. 受講生の学び

「地域リーダー実践（上級）Ⅰ，Ⅱ」の受講を以て8人の正規受講生は「次世代地域リーダー育成プログラム」の修了証と「学生コーディネーター」の称号を学長から授与された。その後、4年生だったBチームの5人は卒業し、Aチームの3人及び聴講生1人は平成28年度現在も引き続き大学に在籍している。

そこで、間をおいて改めて振り返った時にどのような学びがあったのかを明らかにするため、在校生の4人に追跡インタビューとして実施した。最初の企画が予定通りに進まなかったチームのメンバーなので、苦勞したことや問題点だと感じることを、何を学んだかという2点について個別に聞き取りをしている。以下、まず聞き取り内容を要約して記載した後、問題点や学習内容について整理する。

#### インタビュー結果

<地域科学部2年生>

「最初は現実感がなかった。リーダーをやることになったが、これまでグループワークは参加してもリーダーをやったことがない上にメンバーが上級生ばかりで、何をすればいいのか先が見えなかった。自分が何をやりたいのかもあんまり考えていなかった。

8月の合宿がポイント。自分自身の思いとか、他の人がどう思っているのか、各自の思いを再確認することができて、目標も立て直して、よしやろう、という気になった。ツアーの内容も現実味を帯びて、先輩が色々動いてくださったのを見て、自分もちゃんとやろうと思えるようになった。

よい経験だったし勉強になったと思う。自分が成長したか…しましたか？」

<教育学部3年生>

「最初はどんな授業なのかもよく分からなかった。企画のやり方も分からないし、ゴールもよく分からない。企画目標もころころ変わっていたし。教育実習で抜けるタイミングがあるので、そこはやりにくかった。気づいたら進んでいてどうなっているかが分からなくなってしまふ。情報共有をできていなくて、何となく納得しないまま進んでいたのはよくなかった。聞いたらちゃんと答えてくれるので、思ったことは言わないといけないなと思った。

企画内容は値段の問題が大きかった。田舎でも色々あることは実感したので、他の地域のことを知るのも大事だと思う。取りあえず行くより何をしたいのか決めてから行くほうが良いと感じた。

文献調査とか輪読は、今も似たようなことをやっていて経験が役に立っていると思う。学部によって興味の対象が違うのが面白かった。それぞれどんな勉強をしているのかわかっていたら、聞きたいことがあったときにもっと聞きやすかったかなと思う。ほとんど初対面

のメンバーだから、自己紹介を最初にじっくりやっているとよかった。」

<工学研究科修士課程1年生>

「チームでやるんだ，ということを明確に意識するようになったのが一番大きい学んだこと。しんどいことは2回あった。

1回目は最初の頃，目的が分からなくて辛かった。企画の方向も不明だし，最初にやれると思っていたことと違ったからあんまりやる気も起きなかった。8月の合宿が転機になって，誰をターゲットにするとか，企画の向きがはっきりしてきて動きやすくなった。一回延期になってしまって，ずっとやってきたのを頓挫させたくないなと思ったのと，僕がある程度前に出ないと仕方がないのかなと思って，やらなきゃいけないと思った。

2回目は，それでやりだしたけれど，作業の優先順位がついていなくて進めなくて空回りしているのがしんどかった。時間がなくなって，やるしかなくなって，合宿の後しばらく作業を小出しに頼んでいたのを「広報お願い！」みたいに責任も丸ごと投げるようになった。そうしたら思っていた以上に応えてくれたから，チームメイトを頼ってよいんだなと思えたのはよかった。」

<工学研究科修士課程1年生（聴講生）>

「研究室の先生に誘われてきただけだったから，1年間の授業って言われてまずびっくりした。それで気持ちの面でもついていけなかった部分があったのは申し訳なかった。興味のあることならもっと動けたかな。同級生が一緒だったからやれた。いなかったら…いなくても（研究室の先生に言われてきているから）逃げ場がないし残ったかな。

相手の反応とか，確信のないことをやるのは辛かった。バス会社との予算交渉とか，相談とか，やりにくくてつい後回しにしていた。あれはちょっとよくなかったと思う。おかげで，締切りをちゃんと気にするようになった。石徹白に何度も行って地域の人と関係ができたのは嬉しかった。」

### 授業の課題と学びの内容

インタビュー内容から，特に授業開始時期の最初の部分で改善の余地が大きいことが分かる。初開講で手探りの部分も多かったとはいえ，目的設定が十分でなく，それによって学生が迷ってしまった点は明らかに授業運営側の反省点である。各学生の「先が見えなかった」「ゴールもよく分からない」「目的が分からなくて辛かった」「誘われてきただけ」というコメントはいずれもこれに起因する。

同時に，最初の関係づくりも不足していた点が挙げられる。「自己紹介を最初にじっくりやっているとよかった。」という発言に象徴されているが，初期のAチームは全員が発言を控えるような雰囲気があり，議論が活発化する場面は少なかった。

目的設定が不十分という点は早い段階で教員も認識しており，後発のBチームでは解消を試みた。最初に「何のために」「何をするのか」を話し合う時間をじっくり確保しており，かえって机上の空論になりそうな側面もあったが，実際に現地へ行くようになって徐々に

落ち着いた形である。また、Bチームはもともと同じ講座のメンバーであり、改めて関係づくりをする必要がなかったことは、この場合良い方に作用したと思われる。

インタビューを通じて、学びの内容で何に価値を置いているかは、学生によって様々であることも明らかになった。

地域科学部2年生は、最終的な自分の成長について明確な言及はなかったが、最も顕著に成長を見せてくれた学生である。最初と最後の振り返り文を見せながらのインタビューで、文章がしっかりしてきたこと、言葉にする力がついてきたことを指摘すると「指導のおかげです」という返答がされた。リーダー役を割り当てられた当初、本人も認識していたように振る舞い方に自信がなく、発言も語尾の消えるようなものが多かったのだが、授業の振り返りで平野氏からの質問に対してしっかり自分の意見を述べており、他のメンバーから「彼があんなに話すようになるなんて驚いた」という指摘があった程である。

教育学部3年生は、途中実習によるブランクがあったことも影響して、グループワークで何かを得たというよりも各自で進めた調査活動の経験を評価している。

修士課程の正規受講生は既にボランティアやインターンシップなど、様々な地域活動の経験がある学生で、当初教員としては修士課程として参加している立場から一歩引いていたのを、企画が動かないことを見かねて前に行くよう行動を変化させたのだろうと捉えていた。しかし本人へのインタビューにおいて、チームを意識して行動する、ということ自体が大きな学びであったと語られており、チーム管理の面での学習成果が大きかったという評価である。

聴講生は、参加動機が弱く行動が鈍かったことを自覚することができている。振り返りの時点では、行動の鈍さとそれによる企画への影響を考えさせたかったが、前者をかりうじて整理するに留まった。チームへの影響という部分までは振り返りが至っていないが「あれはちょっとよくなかった」という評価が下せているのは一つの成長といえよう。

## 5. まとめ

「地域リーダー実践（上級）Ⅰ，Ⅱ」は、学生主体ですべてを動かすスタイルを取る。教員は議論が大筋を離れないように状況を確認し、企画が地域の方への提案に足るものとなるように助言を行う。

したがって最初の目的設定は、教員からの告知で済ませるのではなく学生全員が納得するまですり合わせる必要がある。それが不十分であったAチームについては、それだけが原因ではないにしても、結果として当初の企画を遂行できないという事態が生じ、まずそこを丁寧に取り組んだBチームは比較的順調に企画をこなすことが出来た。

一方で、Aチームはメンバーで一番若い2年生がリーダーとなり、転機となった合宿以降チーム内での対話が増えた流れもあって、実質的に修士課程の受講生がリーダー役となっていたのに対し、同学年5人の中から特に決断力の高いリーダーが選出されたBチームで

は、リーダーの勢いにメンバーが押され気味になる場面も見て取れた。

一年間の活動を通じた学びの成果は各学生によって異なるが、その中でチームへの意識を語るケースがあったことは、次世代地域リーダー育成プログラムの上級科目として、目的とする役割を一定程度果たせた証左といえよう。

#### 【謝辞】

平成 27 年度「地域リーダー実践（上級）Ⅰ，Ⅱ」の開講中、フィールドとさせていただいた石徹白地区の方々や白鳥中学校区の小学校関係者の方々には多大なサポートを頂きました。特に現地コーディネーターの平野氏には、両チームの活動について適切なお助言、ご指導を頂き、また様々な地域の方との間を取り持って頂く等、委嘱の枠を超えて大きなご助力を頂きました。誠にありがとうございました。

A チームの活動では、ツアーのアテンドに関して学生との連絡窓口も含めてご対応くださった吉田様を筆頭に、NPO 法人やすらぎの里いとしろの皆様非常に世話になりました。B チームの活動では石徹白小学校長の國井先生に、事前アドバイスから実際の施設の利用まで大変なご厚意を頂きました。また郡上市教育委員会の方々にも事前にアドバイスを頂き、白鳥中学校区の小学校長先生方にも企画の申し込み受付補助という不躰なお願いをきいていただきました。末筆ながらご協力いただいた皆様に心から御礼申し上げます。

## **The report of “Training of Community Leaders (Advanced) I II”**

### **Advanced classes of the Next Generations Community Leaders Training Program**

Asuka Tsukamoto, Koichi Omiya, Koichi Masukawa  
Center for Collaborative Study with Community, Gifu University

#### **Abstract**

This is a report about “Training of Community Leaders (Advanced)<sup>1,2</sup>” in 2015, which are advanced classes of the next generations community leaders training program offered in Center for Collaborative Study with Community (CCSC). In 2015, 9 students took these classes, were divided into two teams, and challenged making programs for resolution of problems in communities. We chose Itoshiro district in Gujo city as our fieldwork area in 2015.

Team A made the tour program in Itoshiro to make young people Itoshiro fan, because one of big issues in Itoshiro was the depopulation problems and they tried to get young people who would love Itoshiro. Team B made the activity program for elemental school children. In Itoshiro, there is only one elemental school and the students must go to Shirotori junior high school which located outside of Itoshiro. Therefore, the target of their program was 6th grade students who would go to Shirotori junior high school in next spring, and the purpose was to build relations among the elemental school students.

In this report, we mention about the overview of each teams, consider what the members of the advanced classes could learn through interview to 4 students who are still enrolled in 2016, and check the effect of this educational program.

Key Words : Center of community ・ next generations community leaders training program ・ activities with community ・ active learning ・ Itoshiro Gujo